

二〇二二年度入学試験問題

国

語

(五〇分)

第二回 二月二日実施

〔注意〕 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
問題用紙も提出しなさい。

吉祥女子中学校

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

昼休みの教室には、机をくつつけたいくつもの島ができていた。大陸と呼びたいような大所帯もある。中学の給食の時間とは違う。
A 仲の良い相手と昼食をともにすることができると。

入学式から半月以上過ぎた。僕は教卓の近くの、机みつつ分の島にいる。宮多を中心とする、五人組のグループだ。

宮多たちは、にゃんこなんとかという僕の知らないスマホゲームの話で盛り上がっている。猫のキャラクターがたくさん出てきて戦うのだという。ゲームをする習慣がないから、意味がよくわからない。さっきからぜんぜん会話に入れない。課金とかログインボーナスという単語が飛び交っている。もう、相槌すら打てなくなってきた。

祖母の顔を思い出して、懸命に話についていこうとした。だって友だちがいないのは、よくないことなのだ。家族に心配されるよくなことなのだから。

「なあ、松岡くんは」

宮多の話す声が、途中で聞こえなくなつた。ふいに高杉くるみが視界に入ったから。

① 世界地図なら、砂粒ほどのサイズで描かれる孤島。そこに彼女はいた。箸でつまんだたまごやきを口に運んでいる。唇の両端がきゅっと持ち上がった。② 虚勢を張るわけでもなく、おどおどするでもなく、たまごやきを味わっている。その顔を見た瞬間「ごめん」と口走っていた。

「え」

「ごめん。俺、見たい本あるから席に戻るわ」

ぽかんと口を開ける宮多たちに、背を向ける。

図書室で借りた、世界各国の民族衣装に施された刺繍を集めた本を開く。宮多たちがこの本に興味を示すとは到底思えない。わ

かつてもらえるわけがない。ほんとうは『明治の刺繍絵画名品集』というぶあつい図録がよかった。残念ながらそちらは貸出禁止になつていたので。どのように糸を重ねてあるか、食い入るように眺める。ここはこうなつて、こうなつて。勝手に指が動く。

ふと顔を上げると、近くにいた数名がこつちを見ていた。男女混合の四人グループのうちのひとりが僕の手つきを真似て、くすくす笑っている。

「なに？」

自分で思っていたより、大きな声が出た。他の島の生徒たちが気づいて、こちらに注目しているのがわかった。宮多たちも。でももう、あとには引けない。

「なあ、なんか用？」

まさか話しかけられるとは思っていなかったのか、ひとりがぎよっとしたように目を見開く。その隣の男子が「は？ なんなん」と頬をひきつらせた。

「いや、なんなん？ そつちこそ」

べつに。なあ。うん。彼らは **B** と言ひ合ひ、視線を逸らす。教室に、ざわめきが戻る。遠くで交わされるひそやかなささやきや笑い声が、耳たぶをちりつと掠めた。

校門を出たところでキヨくん、と呼ばれた。振り返つたその瞬間に、強い風が吹く。

キヨくん。小学校低学年の頃のままに、高杉くるみは僕の名を呼ぶ。当時は僕も彼女を「くるみちゃん」と親しげな感じで呼んでいたのだが、学年が上がるにつれて会話の機会が減り、今ではもうどう呼べばいいのかわからない。

「高杉さん。くるみさん。どつちで呼んだらええかな？」

「どつちでも」

名字が高杉というだけで塾の子らに「晋作」と呼ばれていた時期があつて嫌だった、なので晋作でなければ、なんと呼ばれても構わないらしい。

「高杉晋作、嫌いなん？」

「嫌いじゃないけど、もうちょい長生きしたいやん」

「なるほど。じゃあ……くるみさん、かな」

歩いていると、グラウンドの野球部やサッカー部の声がどんどん遠くなっていく。今日は世界がうつすらと黄色くて、遠くの山がぼやけて見えた。春はいつもそうだ。すべての輪郭があいまいになる。

「あんまり気にせんほうがええよ。山田くんたちのことは」

「山田って誰？」

僕の手つきを真似て笑っていたのが山田某らしい。

「私らと同じ中学やったで」

「覚えてない」

個性は大事、というようなことを人はよく言うが、学校以上に「個性を尊重すること、伸ばすこと」に向いていない場所は、たぶんない。柴犬の群れに交じたナポリタン・マステイフ。あるいはポメラニアン。集団の中でもはやされる個性なんて、せいぜいその程度のもんだ。^④犬の集団にアヒルが入ってきたら、あつかいに困る。

アヒルはアヒルの群れに交じれば見分けがつかなくなる。その程度のめずらしさであっても、学校ではもてあまされる。浮く。

注 *某……その人物の名前が不明な場合に代わりに用いる語。

*ナポリタン・マステイフ、ポメラニアン……どちらも犬の種類。

くすくす笑いながら仕草を真似される。

「だいじょうぶ。慣れてるし」

けど、お氣遣いありがとう。そう言っ隣を見たら、くるみはいなかった。数メートル後方でしゃがんでいる。灰色の石をつまみあげて、**C**と観察しはじめた。

「なにしてんの?」

「うん、石」

うん、石。ぜんぜん答えになってない。入学式の日「石が好き」だと言っていたことはもちろんちゃんと覚えていたが、まさか道端の石を拾っているとは思わなかった。

「いつも石拾ってんの? 帰る時に」

「いつもではないよ。だいたい土日にさがしに行く。河原とか、山に」

「土日? わざわざ?」

「やすりで磨くの。つるつるのぴかぴかになるまで」

放課後の時間はすべて石の研磨にあてているという。ほんまにきれいになんねんで、と言う頬がかすかに上気している。

ポケットから取り出して見せられた石は三角のおにぎりのような形状だった。たしかによく磨かれている。触ってもええよ、と言われて、手を伸ばした。指先で、しばらくすべすべとした感触を楽しむ。

「さっき拾った石も磨くの?」

くるみはすこし考えて、これはたぶん磨かへん、と答えた。

「磨かれたくない石もあるから。つるつるのぴかぴかになりたくないってこの石が言うてる」

石には石の意思がある。駄洒落のようなことを真顔で言うが、意味がわからない。

「石の意思、わかんのか？」

「わかりたい、といつも思ってる。それに、びかびかしてないときれいやないってわけでもないやんか。ごつごつのざらざらの石のきれいさってあるから。そこは尊重してやらんとな」

じゃあね。その挨拶があまりに唐突でそっけなかったので、怒ったのかと一瞬焦った。

「キヨくん、まっすぐやろ。私、こっちやから」

川沿いの道を一步踏み出してから振り返った。ずんずんと前進していくくるみの後ろ姿は、巨大なリユックが移動しているように見えた。

石を磨くのが楽しいという話も、石の意思という話も、よくわからなかった。わからなくて、おもしろい。わからないことに触れるということ。似たもの同士で「わかるわかる」と言い合うより、そのほうが楽しい。

ポケットの中でスマートフォンが鳴って、宮多からのメッセージが表示された。

「昼、なんか怒ってた？ もしや俺あかんこと言うた？」

違う。声に出して言いそうになる。宮多はなにも悪いことをしていない。ただ僕があの時、気づいてしまっただけだ。自分が楽しいふりをしていることに。

いつも、ひとりだった。

教科書を忘れた時に気軽に借りる相手がいらないのは、心もとない。ひとりではつんと弁当を食べるのは、わびしい。でもさびしさ

をごまかすために、自分の好きなことを好きではないふりをするのは、好きではないことを好きなふりをするのは、もっともっとさ

びしい。

好きなものを追い求めることは、楽しいと同時にとても苦しい。その苦しさに耐える覚悟が、僕にはあるのか。

文字を入力する指がひどく震える。

「ちやうねん。ほんまに本読みたかっただけ。刺繍の本」

ポケットからハンカチを取り出した。祖母に褒められた猫の刺繍を撮影して送った。すぐに既読の通知がつく。「こうやって刺繍するのが趣味で、ゲームとかほんまはぜんぜん興味なくて、自分の席に戻りたかった。ごめん」ポケットにスマートフォンをつっこんだ。数歩歩いたところで、またスマートフォンが鳴った。

「え、めっちゃうまいやん。松岡くんすごいな」

そのメッセージを、何度も繰り返し読んだ。

わかってもらえるわけがない。どうして勝手にそう思いこんでいたのだろう。

今まで出会ってきた人間が、みんなそうだったから。だとしても、宮多は彼らではないのに。

いつのまにか、また靴紐がほけていた。しゃがんだ瞬間、川で魚がばしゃんと跳ねた。波紋が幾重にも広がる。太陽の光を受け、た川の水面が風で波打つ。まぶしさに目の奥が痛くなって、じんわりと涙が滲む。

きらめくもの。揺らめくもの。目に見えていても、かたちのないものには触れられない。すくいとって保管することはできない。

太陽が翳ればたちまち消え失せる。だからこそ美しいのだとわかっていても、願う。布の上で、あれを再現できたらいい。そうすれば指で触れてたしかめられる。身にまとうことだって。そういうドレスをつくりたい。着てほしい。すべてのものを「無理」と遠ざける姉にこそ。きらめくもの。揺らめくもの。どうせ触れられないのだから、なんてあきらめる必要などない。無理なんかじゃないから、ぜったい。

どんな布を、どんなかたちに裁断して、どんな装飾をほどこせばいいのか。それを考えはじめたら、いてもたってもいられなくなる。

それから、明日。明日、学校に行ったら、宮多に例のにやんこなんとかというゲームのことを、教えてもらおう。好きじゃないものを好きなふりをする必要はない。でも僕はまだ宮多たちのことをよく知らない。知ろうともしていなかった。

⑩

靴紐をきつく締め直して、歩く速度をはやめる。

(寺地はるな『水を縫う』)

問一 A ～ C にあてはまる言葉を次の1～6からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。同じ番号をくり返し使っては
けません。

- 1 どんどん 2 じろじろ 3 そろそろ 4 めいめい 5 しげしげ 6 もごもご

問二 ～～～～線ア「虚勢きよせいを張る」・～～～～線イ「心もとない」とはどのような意味ですか。もつとも適当なものを次の1～4からそれ
ぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

ア 「虚勢を張る」

- 1 恥はずかしそうにする 2 つらそうにする 3 好きなふりをする 4 からいばりをする

イ 「心もとない」

- 1 悲しい 2 頼たよりない 3 うしろめたい 4 気が置けない

問三 ——線①「世界地図なら、砂粒すなつぶほどのサイズで描えがかれる孤島ことう。そこに彼女かのよはいた」とはどういうことですか。もつとも適当な
ものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 高校はグループごとに自由に昼食をとるが、その中で高杉くるみだけが敢あえてひとりでいたということ。
2 高校には色々なタイプのクラスメートがいる中でも、高杉くるみは特に際立きわった存在だったということ。
3 友だち同士机をくっつけてにぎわっている中、高杉くるみはたったひとりで昼食をとっていたということ。
4 高杉くるみが必要なグループの横でひとり昼食をとりつつ、仲間に入る機会をうかがっていたということ。

問四 —— 線② 「その顔を見た瞬間「ごめん」と口走っていた」とありますが、この時の「僕」の気持ちとしてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

を次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 自然体で昼食を楽しんでいる高杉くるみの顔を見た瞬間、自分はひとりになるのを恐れて周囲に合わせ、楽しいふりをしていただけだったということに気がついた。

2 淡い恋心を抱いている高杉くるみの顔を見た瞬間に、たとえ友人を傷つけることになっても良いから自分の好きなことに対して正直でいようという勇氣が生まれた。

3 自分の好きなことに対していつもまっすぐな高杉くるみの顔を見た瞬間、好みや生活習慣のちがう宮多たちとは自分はわかりあえないことに気づき、悲しくなった。

4 誰に対しても気丈に自分の意見を表明する高杉くるみの顔を見た瞬間、いつも友人の言いなりになって何も言い返すことができない気の弱い自分に嫌気がさした。

問五 —— 線③ 「耳たぶをちりりと掠めた」とありますが、この時の「僕」の気持ちとしてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

一つ選び、番号で答えなさい。

1 せっかく楽しく本を読んでいたのに、クラスメートにじゃまをされた「僕」が、怒りを押し殺している。

2 あざ笑うような視線に対して声を荒げてしまった「僕」が、軽率なことをした自分を恥ずかしく思った。

3 友人がおらず、休み時間もひとりで本を読んでいる「僕」が、周囲になじめないさびしさを感じている。

4 みんなとちがうことをする「僕」が、周囲からひそかに嘲笑されているのを感じて、心に痛みを覚えた。

問六 —— 線④「犬の集団にアヒルが入ってきたら、あつかいに困る」とはどういうことですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 どの人の個性も尊重されるべきであり、異質な存在があれば周囲のみんなの方が接し方を考えるべきなのだという事。
- 2 集団の中で認められる個性にも許容の範囲はんいがあつて、まったく異質な存在は周囲にとって迷惑めいわくなのだという事。
- 3 個性を尊重しようとしても、言葉の通じない異質な存在にはどう接したらよいか誰も見当がつかないという事。
- 4 個性が大事とはいえ集団の中に一つだけ異質な存在があれば周囲が困るため、立場をわきまえるべきだという事。

問七 —— 線⑤「石の意思という話」とありますが、くるみがこの話を通して「僕」に伝えようとしていることの説明としてみっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 他人に流されなにかたい意思を持っている人は貴重な存在であるため、大切にすべきだという事。
- 2 才能を磨くよりも、荒削りあらけずのままの方がまばゆいかがやきを放つことができるものだという事。
- 3 必ずしも周囲に合わせて自分を変える必要はなく、それぞれの考えが認められるべきだという事。
- 4 気の合う友人同士で集まるよりも、異なる意見を持つ人と話す方がはるかにおもしろいという事。

問八 —— 線⑥「自分の好きなことを好きではないふりをする」・⑦「好きではないことを好きなふりをする」とありますが、「僕」にとってそれぞれにあてはまるものを次の1～6から一つずつ選び、番号で答えなさい。同じ番号をくり返し使つてはいけません。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|--------|---|---|---|-----|---|---|---|----|---|---|
| 1 | スマホゲーム | 2 | 猫 | 3 | 友だち | 4 | 本 | 5 | 刺繡 | 6 | 石 |
|---|--------|---|---|---|-----|---|---|---|----|---|---|

問九 —— 線⑧「文字を入力する指がひどく震える」のはなぜですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問十 —— 線⑨ 「あれ」とは何ですか。四十字以上五十字以内で書きなさい。

問十一 —— 線⑩ 「靴紐をきつく締め直して、歩く速度をはやめる」とありますが、この時の「僕」の気持ちとしてもっとも適当なもの^なを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 宮多たちのことをもつとよく知るため勇気を出して話しかけようと固く誓うと同時に、きつと理解してもらえないはずだと胸躍^{おど}らせる気持ち。

2 好きなものを追い求めることは楽しいと同時に苦しいが、その苦しさ^のに耐える覚悟を決め、どんな困難^のをも乗り越えようと決心する気持ち。

3 好きなものを追い求めることや周囲の人々と理解し合うことをあきらめないと強く決意すると同時に、それがかなうことを期待する気持ち。

4 無理なことなどないと気づき、努力すれば何だって成し遂げられるはずだと実感すると同時に、姉を絶対に感動させたいと意気込む^{きこ}気持ち。

二

次の「文章Ⅰ」、「文章Ⅱ」を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。なお、「文章Ⅱ」は「文章Ⅰ」の中にある~~~~線「上橋さんからのお便り」にあたる文章で、オオワシやオジロワシが巨大風車のブレード（三枚羽）に一刀両断されたり、オーストラリアのカンガルーが交通事故にあったりしていることに続く部分です。

「文章Ⅰ」

一年で最もさわやかな季節になりました。

私の友人がこのあいだブログに「鼈始鳴とはよく言ったもの……」と書いていました。東京に住んでいると蛙の鳴き声は聞こえてきませんが、動物の行動はかなり正確に季節の移り変わりを反映するようです。

①この「鼈始鳴」は七十二候と呼ばれる、一年の季節の分け方の一つです。季節といえば、現代の私たちにとっては春夏秋冬の四季がお馴染みですが、四季の始まりとピークで仕切ると、立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至の八つになり、これを八節というのだそうです。四季と八節で「季節」というわけですね。

さらに、こよみを開いてみると、八節の三倍、一年を二十四に分けた二十四節気があり、そのまた三倍に細かく分けたのが七十二候、というわけです。

一年を七十二にも分けてしまうと、ほんの五日ぐらいで次の区切りにうつろいゆくのですが、「蛙の鳴き始めが聞けるのは一年でこの時期だけ」とばかりに、儂い時候の変化を惜しむことができるのは、日本の気候風土がそれだけダイナミックで変化に富んでいるからなのでしょう。

日本列島は国土は狭いですが、国土の三分の二が森林におおわれ、先進国ではフィンランド・スウェーデンに次ぐ規模の割合なの

だそうです。これだけ森林が豊かなのは、雨がよく降り、水資源に恵まれているということがあります。湿度の高い環境で落ち葉や枯れ木が朽ちると肥沃な土となります。私たちのご先祖様はこの土壌を耕して、豊かな実りを享受してきました。

なぜ日本は雨が多いかというと、海に囲まれていて、切り立った山地があり、風が吹くからです。冬はシベリアの凍てついた大地から、夏は太平洋の暑い大海原から季節風が起り、海上を吹き渡る間に大量の水蒸気を帯びて、日本の山地にぶつかって雲となり、降水をもたらします。水は大いなる恵みの源ですが、しばしば大雪・大雨・洪水という形で私たちに襲い掛かってくる、厄介な存在でもあります。

そしてもうひとつ、なぜ日本列島が大陸と大洋の狭間にあり、山がちな地形であるのか、ということについては、地球惑星科学が答えてくれます。

地球は太古の昔、ドロドロに溶けた溶岩の塊でしたが、時間の経過とともに表面が冷え、溶岩は固まって厚い岩盤となり、その上に大陸と海洋が形成されました。ところが、皮めくるとその下は液体状の溶岩ですから、溶岩が流れ動くにしたがいその上の岩盤も徐々に動きます。そのうちに、岩盤同士がぶつかって盛り上がったり、ある岩盤の下にもう一方の岩盤がめり込んだりします。こうして高い山脈と深い海溝が形成された、という説をプレートテクトニクス説といいます。

日本列島は、ユーラシア側の巨大な岩盤に、太平洋側のこれまた大きなプレートがめり込んでできた、巨大な海溝（日本海溝）のすぐ西側に位置します。太平洋側のプレートはいまなお一年に数センチずつめり込み続けており、めり込む際に太平洋側のプレートに長年かけて降り積もった堆積物がユーラシア側に乗りに上げたもの（付加体）が列島の原型になったそうです。その後数億年かけてユーラシア側から列島を切り離す動きも起り、最終的に日本海と、いまの形の四つの大きな島になりました。

つまりは、プレートとプレートの巨大なシワ寄せの上に私たちは立っていて、そこに風が吹き、雨が降り、深山幽谷が形作られています。さらには太古の地球を偲ばせる溶岩が噴き出す世界有数の火山国でもあり、美しい自然の風景を目にしながら温泉を楽しむ

ことができます。

A、先ほどの「水」と同様、地球の「火」のエネルギーは、私たちに恵みだけではなくすさまじい災いをもたらします。前回のお手紙では、それを八重山の昔語りとして書きましたが、上橋さんからのお便りを待つうちに、嘆かわしくも、またもや新たな災いを現在進行形の形で目にすることとなってしまいました。

今回の熊本地震を、さきの東日本大震災と関連したものととらえ、日本は九世紀以来の地震活動期に入ったのだ、と言う専門家もいます。確かに、熊本地震は震度7が立て続けに二回起こるといって、観測史上いままでも例のないものでしたし、東日本大震災の津波は、明治や昭和に経験された大津波を上回る規模で、同規模の津波は八六九年の貞観地震にまでさかのぼると言われています。一年を軽く上回る時間のスパンというものは、**④**現代の科学者・技術者たちの「想定外の箱」を遙かに外れていたために、私たちはこの国で史上最悪の原発事故を目撃することになりました。

考えてみれば、地震や津波、火山噴火のほか、大雨・大雪・洪水、山崩れや雪崩、暴風や高潮、旱害や冷害など、自然災害の塊のような土地に、一億二千万人の人口が住んでいるのは不思議なことです。**⑤**災いを上回る恵みがあるからでしょうか？ そうとも考えられますが、火山学者の研究によると、南九州では数千年に一度巨大なカルデラ噴火が起きており、直近の……といっても七千三百年前ですが……鬼界アカホヤ噴火と呼ばれる大規模な噴火では、九州一円の縄文文明が壊滅したそうです。このような破局的出来事に対しては、どのような防災技術を以つてしても対策とはなりません。できることがあるとすれば、いまのうちに九州から全人口を退避させ、立ち入り禁止区域にすることぐらいですが、それは現実的な選択肢とはならないでしょう。

B、ここまで大きな災害でなければ、対策を立てられることはいくらでもあるので、私たちはある程度の安全を確保してこの地に住み続けています。一千年に一度の災害には、見通しの立たない原発災害を抱えながらも、何とか耐え忍んで生きています**⑥**が、一万年に一度の災害には、全くなす術がないものであろうと予測します。この国で生きていくには、100%の安全を諦め、日々う

すうす死ぬ覚悟かくごをしておくことが必要なのかもしれませんが。

こんなことを考えだすと、一刻も早く日本を脱出だつしゅつし、どこか安全な外国で命の心配をしないで生きていきたい……と思わなくもないのですが、外国暮らしは外国暮らしでリスクがあります。一万年に一度の災害に遭あうことを心配するのであれば、だいたい飛行機や船だつて乗れません。日本より治安の悪い国はたくさんあるし、安定した収入や住居を確保できないかもしれません。

結局、私たちは一生、災いと付き合っていかなばならないのだ、と思った瞬間しゆんかん、あることがひらめきました。私たちに恵みをもた
らすものと、災いをもたらすものは、全く同一なのではないか。不可分であると考えらるならば、私たちが産みだしたものと、私
を滅ほろぼすものもまた、同一不可分のものではないか、ということでした。

【文章Ⅱ】

球が飛んでくれば、ぱつと避けるように、動物には、「考えずに、反射的に動く」能力が備わっているはずですから、車が車として認識にんしきできなくても、そういう反射的な反応を引き起こす状態であれば、カンガル―は逃にげるでしょう。

でも、そうでない瞬間が、存在するのかもしれない。車が、避けるべきものとは感じられない、とても異質な——自分が認識できる世界にはない——ものとして、彼らかれの前に姿を現す瞬間が。

目の前に忽然とつぜんと姿を現す、途方とほうもなく大きな風車。足音をさせずに高速で近づいてくる物体。そういう「異質な」ものは、見えて
いるのに、見えない、ということが、あり得るのかもしれない。

⑦ 目で見る事ができる物体でさえ、ときに「見えない」状態になるというのは、なんとも不思議ですが、私には、このことが、生き物の認識の本質に深く関わっているような気がしてならないのです。

もしかすると、生き物はそれぞれ、「想定」の箱の中で暮らしているのではないか。自分と、自分を取り巻く世界が「こういうも

のである」という「想定の箱」の中で。

その想定の外にあるものは、見えない。認識できない。——そういうことが、あるのかもしれませんが。

津田先生が前回のお便りで多様性について触れておりましたが、ある生き物にとっての「想定の箱」は、意外に共通していて、多様性の幅は狭いのかもしれないという気がしています。

例えばヒトのように、視覚——目で見ること——が、とても大切になっている生き物にとっては、「見えるか、見えないか」が、「あるか、ないか」を想定する基準になっていて、それは、とても頑固で強力な基準として共有されているような気がするのです。

でも、世の中には、ふと、「想定の箱」の外に思いを巡らし、見えないものでも、在るのではないかと考えることができる人もいて、そういう人が、常識の中に埋没しては決して気づくことのできぬ、思いもかけぬ何かに気づき、新しい道を見出し、たのかもしれない。だとすれば、津田先生が前回のお便りで書いておられたように、一様な「想定の箱」の中にいられない、多様な人がいることが、人類をここまで生き残らせてきたのかもしれませんね。

（上橋菜穂子、津田篤太郎『ほの暗い永久から出でて 生と死を巡る対話』）

問一 —— 線①「鼈始鳴」は七十二候と呼ばれる、一年の季節の分け方の一つ」とありますが、この季節に最も近いものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 立春 2 立夏 3 立秋 4 立冬

問二 —— 線②「日本の気候風土」とありますが、文中で述べられている日本の気候風土の説明として正しいものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 国土の大半を森林が占めているため、雨がよく降って水資源が豊富である。
- 2 豊かな水によって土壌が耕しやすくなり、季節ごとに多くの食物を得てきた。
- 3 国土を海に囲まれていることが、水による災いの原因の一つになっている。
- 4 季節によって異なる方向から風が吹いて雲を運ぶために、雨が多くなる。

問三 —— 線③「巨大なシワ寄せ」とは具体的に何を指していますか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問四

A	・	B
---	---	---

 にあてはまる言葉の組み合わせとしてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 A すると B たしかに
- 2 A そして B それゆえ
- 3 A だから B つまり
- 4 A しかし B もちろん

問五 —— 線④「現代の科学者・技術者たちの「想定の箱」とありますが、

(1) それはどういふことですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 空想を含めあらゆる科学技術を結集して創り上げた物語。
- 2 これまで蓄積して来た経験を元に科学的に推測した知見。
- 3 すべての歴史的事実を解明してきた現代の最先端科学技術。
- 4 技術の進展も考慮に入れた今後の世界の科学的展望。

(2) 「想定の箱」は、「文章Ⅱ」では何と言いかえられていますか。文中から漢字二字でぬき出しなさい。

問六 —— 線⑤「災いを上回る恵み」とありますが、「恵み」とはどのようなことですか。 —— 線⑤より前の文中の言葉を用いて

三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問七 —— 線⑥「一万年に一度の災害」とありますが、筆者の言う「一万年に一度の災害」にあてはまるものを次の1～4から一つ

選び、番号で答えなさい。

- 1 熊本地震
- 2 東日本大震災
- 3 貞観地震
- 4 鬼界アカホヤ噴火

問八 —— 線⑦「目で見ることができ物体でさえ、ときに「見えない」状態になる」とはどういうことですか。次の1〜4から
もつとも適当なものを一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 生き物は種に応じて頑固で強力な基準を共有しているが、その基準がときに変化するということ。
- 2 生き物には確立した生態系があるため、その範囲を越えてしまうと対応しきれないということ。
- 3 自分が予測し得る範囲を越えてしまったときには、見えてはいても認識ができないということ。
- 4 これまでの経験にとらわれずに多様な見方ができる人というのは、ごく少数しかいないということ。

問九 —— 線⑧「多様な人」とはどのような人のことですか。次の1〜4からもつとも適当なものを一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「想定外の箱」という考え方がそもそもないために、自由な発想によつて発言を色々に変えて人々を惑わす人。
- 2 いくつもの「想定外の箱」を持っているため、柔軟な発想によつてその場に応じた臨機応変な対応のできる人。
- 3 自由な発想によつて常に「想定外の箱」の外に思いを巡らすことで、人々の悲しみを取り除くことのできる人。
- 4 「想定外の箱」に収まらない柔軟な発想で世界を見ることで、人々とは異なる方法を模索することのできる人。

問十 —— 線X「私たちに恵みをもたらすものと、災いをもたらすものは、全く同一なのではないか」とありますが、私たちに恵み
と災いをもたらすものの例を一つ挙げ、その両面について七十字以上八十字以内で説明しなさい。ただし、本文中の例を用いてはい
けません。



次の1～6の——線のカタカナを漢字で書きなさい。

- 1 人間のノウについて調べる。
- 2 よくジユクした果実。
- 3 彼女のピアノエンソウはすばらしい。
かのじょ
- 4 大統領をゴエイする。
- 5 社会のコンカンを揺るがすような出来事。
ゆる
- 6 空港でリヨケンを見せるよう求められた。

問題は以上です

